KUDAN SECONDARY SCHOOL ・ PRINCIPAL'S LETTER

千代田区立九段中等教育学校　校長室だより

第８号 | 令和８年11月号 | November 2026

令和8年11月1日
校　長　富川　麗子

校歌がつなぐもの～三拍子のワルツにのせて～

着任したら、まず校歌を

教員になってすぐのことです。職員室で隣の席だった先輩の先生が、こんな言葉をかけてくださいました。「学校に着任したら、まずは、その学校の校歌を覚えるといいね」。何気ない一言でしたが、私はそれ以来、新しい学校に着任するたびに、まず校歌を覚えることを自分との約束にしてきました。今年4月、本校に着任した私が最初に覚えたのも、もちろん本校の校歌です。

これまで勤めたどの学校の校歌も、本当に素晴らしいものでした。校歌には、その学校で学ぶ生徒への願いが込められています。繰り返し口ずさむうちに、歌詞の一つ一つが、その学校で出会った生徒や先生方の顔と重なっていく。校歌を覚えるということは、その学校の一員になるということなのだと、私は先輩の言葉の意味を少しずつ理解していきました。

新しい学校を創る仕事に携わったこともあります。校歌も、一から生み出さなければなりませんでした。作詞・作曲をお願いする際、私は校長として、この学校で学ぶ生徒にどのように育ってほしいのか、校歌にどのような願いを託したいのかをお伝えし、校歌を作っていただきました。そのときのことが、今も懐かしく思い出されます。校歌とは、学校の願いを歌のかたちにしたものなのだと、身をもって知った経験でした。

20周年の節目に、全校で歌う校歌

前期終業式、後期始業式、そして創立20周年記念式典。本校では、こうした節目の場で、全校生徒が声を合わせて校歌を歌います。また、10月中旬に実施した5年生のシンガポール・マレーシア海外研修旅行において、マレーシアでの学校交流班の生徒の皆さんは、マレーシア工科大学で本校の出し物の一つとして、校歌を披露しました。

本校の校歌は、作詞が与謝野鉄幹、作曲が山田耕筰。近代日本の詩歌と音楽を代表する二人による校歌です。平成18年に中等教育学校となり、学校名の箇所が「千代田九段中等教育学校」となり、それから20年、この校歌は、入学した日にも、旅立つ日にも、いつも本校の生徒とともにありました。

曲は四分の三拍子、ワルツです。校歌と聞くと、力強い行進曲風の調べを思い浮かべる人が多いかもしれません。けれども本校の校歌は、ゆったりと揺れるような三拍子で進んでいきます。全校生徒の声が重なり、その三拍子のうねりが広がっていく、素晴らしい曲であると感じます。

この校歌は、本校の前身である第一東京市立中学校の時代から受け継がれてきたものです。校章もまた、大正13年に一中の美術教諭がデザインしたものに由来します。開校20年の本校は、同時に、一世紀を超える九段の歴史を受け継ぐ学校でもあるのです。

このような歴史が校歌や校章にはあります。次に校歌を歌うとき、歌詞の言葉を一つ一つ味わいながら歌ってみてください。鉄幹はなぜその言葉を選んだのか。耕筰はなぜ、その言葉に三拍子の旋律を与えたのか。毎回なんとなく歌っていた歌が、問いをもって向き合った途端、まったく違う表情を見せ始めるはずです。それもまた、身近なところから立ち上がる、立派な探究の入口です。

92歳の伴奏、100歳のソプラノ

8年前のことです。私の母校の OG 会で、校歌を歌う機会がありました。指揮をしてくださったのは、高校時代の部活動の顧問の先生。そして伴奏をしてくださったのは、歴代の顧問を務められた先生で、当時92歳でいらっしゃいました。

92歳とは思えない、力強い伴奏でした。その伴奏に支えられ、懐かしい顧問の先生の指揮で校歌を歌ったときの感激は、今も忘れることができません。校歌には、歌う人を一瞬にして在学中の懐かしい日々へと連れ戻す力があります。久しぶりに顔を合わせた仲間も、声を合わせた途端、高校生だったあの頃の私たちに戻っていました。

先日、その伴奏をしてくださった先生の百寿を記念するリサイタルが開かれ、OG 会でお祝いをしました。先生の歌声は、100歳とは思えない、美しいソプラノでした。私はその歌声に、深く感動しました。先月号の「校長室だより」で、彫刻家・北村西望の「たゆまざる歩みおそろし蝸牛」という言葉を紹介しましたが、まさに、歌い続けること、学び続けること、止まらずに歩み続けた人の声は、これほどまでに美しいのだと教えられた一日でした。

校歌がつなぐもの～菊友会大会と東京校歌祭～

10月11日（日）、本校の同窓会である菊友会大会が行われました。大会の終わりには、全員で校歌を斉唱しました。世代の異なる先輩方が、同じ歌を、同じ三拍子で歌う。校歌が、時をこえて人と人とをつなぐものであることを、改めて感じた瞬間でした。

また、10月18日（日）には、杉並公会堂で第34回東京校歌祭が開かれました。都立高校を中心に、校歌を歌い、親睦を深める催しです。本校からは合唱部と吹奏楽部が出演し、吹奏楽部の演奏に合わせて、合唱部が菊友会の皆様とともに、校歌、そして九段の伝統行事である至大荘行事で歌われる「至大荘歌」「至大荘と共に」を歌い上げました。出演した合唱部の生徒は、一中の時代から受け継がれてきた校歌を歌いながら、九段の歴史の長さを実感したと、本校ブログに綴っています。

校歌は、在校生と卒業生を、そして過去と未来をつなぐ歌です。皆さんが卒業して何年、何十年たっても、校歌を歌えば、いつでもこの九段に帰ってくることができます。いつか皆さんも、菊友会の一員として、後輩たちと声を合わせる日が来るでしょう。創立20周年の今、三拍子のワルツにのせて、九段の歌を次の世代へとつないでいきましょう。

❖ ❖ ❖